

孤影口か／怒りの日

淙穂鶯笙



# 孤影、はる 門か

北方の、しかも高山の秋は早足で駆け抜ける。クセスは地方都市にしてはずいぶんと賑わっている。それというのも、「世界の天井」とも呼ばれる山々の中腹にあるこの都市の美しい景観のせいでもある。

主に交易で栄えているカレリアとはずいぶんと趣を異にしている。南部辺境警備隊に属する第十二小隊がクセスくんだり赶赴したのは、エースに言わせれば

「腕が物を言った」

からである。確かに、それが理由であろう。指令は面倒だったが、こなし終わってみれば、これまたエース曰く

「多めの報酬と世界に名だたる観光地での長期休暇」

が待っていた。

ジャックは街を見物に出かけるというアイラにつきあつて出て行った。物資調達のために出て行ったエースは自分で思っている以上には真面目な性格なのだろう。クイーンとジョーカーが宿の一階にもうけられた酒場で呑んでいるのは、いつもどおりだった。

ゲドといえば、街の喧騒を耳に流しながら、あてがわれた宿屋二階の見晴らしのいい部屋から、道行く人々の動きを眺めたり、街

を見下ろす山の端を見つめたりしていた。

高山では雲の様子がさまざまに変わる。見飽きることがない。

「大将、いいですか？」

ノックに引き続いてわずかに開いた扉からエースが顔をのぞかせた。

そちらに視線を流すと、エースはにやりと笑って酒をあおる仕種をした。

「一杯ひっかけませんか。良いのが手に入ったんです」

ゲドが頷くのを確認してエースの顔が引つ込んだ。

ゲドはもう一度山の端を眺めると、ゆつくり部屋を出ていった。ゲドが一階に降り立つてみると、ちょうど、ジョーカーとクイーンがエースの持ち帰った酒を試そうとしているところだった。

カウンターのほうをチラリと見ると、酒場の主人が渋い顔をしていた。エースが他から酒を持ち込んだのが気に入らないのだろう。件のエースといえば、いたずらっぽい笑みを浮かべて酒瓶の首をつかんで二人を見つめている。

「妙な酒だな」

「……クセがあるね」

「俺もそう思った。でも、ま、騙されたと思って、もう一杯飲んで

みな。ゆつくり舌で転がしてな」

不信感も頭<sup>あたま</sup>に二人がもう一度グラスに口をつける。

「うーむ……」

ジョーカーが唸った。

「これ……」

驚いた様子でクイーンがグラスの液体を覗き込んだ。

「な？」

我が意を得たりとばかりに嬉しそうにエースが言った。

「来ましたね、大将。どうぞ」

エースはグラスをゲドに渡すと、すぐに酒瓶を傾けた。トクトクと無色の液体がいい音を立てた。ゲドはそれを口に含むと、目を見張ってまじまじと酒を見つめた。

「二杯目からがいいんですよ」

と注ぐようにするエースをさえぎって、

「どこで手に入れた」

「市に来てた行商人ですよ。なんでも、この街よりずっと高いところに位置する辺鄙な村でつくってるんだそうで」

「瓶に入ってたのか」

「は？ ええ、そうですけど」

グラスに残る液体を見つめて何やら考え込んでしまった己の上官をどう扱っていいものやら判らず、エースはテーブルの二人に助けを求めるような視線を送った。返ってきたのは肩をすくめる仕種だけだった。

出かけてくる、後を頼む、とゲドがエースに告げたのは翌朝のことだった。

何が、といえば、この景色だった。

何が、といえば、この秋風だった。

しかし、ゲドを踏み切らせたのはエースの買ってきた辺境の酒だったのだ。

食料、燃料をたっぷり買い込んで、ゲドは山道に足を踏み入れた。

カレリアの山道と違って、このあたりは木が多く、非常に気持ちがいい。天気も上々だった。

ゲドは細々とした一本道を黙々と歩き続けた。なにやら鳥の声が聞こえてはいたが、姿は見えなかった。

その日の夕暮れ、そろそろ夜営のことを考え出したゲドは、前方に人影を見つけた。ただし、人影だけではない。

翼持つトカゲが二度三度、降下するのが見えた。

——襲われている。

お人好しなつもりはないが、さりとて、目の前で襲われている人間を無視するひとでなしでもない。ゲドは剣を抜くよりもと判断し、右手を上げた。慣れた雷の圧力が瞬時に集まる。

轟——

音を立てて光筋が鉄槌となつて落ちると、辺りを震わす断末魔を残して、翼竜は崖下へ落ちていった。

襲われていたのは、ロバを連れた青年だった。ロバをかばう位置に立っていた青年は、何が起きたのか把握できていない様子で立

## 怒りの日

### 帰郷

エウナーナ・イ・フォエルトはハルモニア北方に位置する高山地の村である。村の名は「戦場の鷲」を意味する辺りの古語で、エウナーナ・イ・フォエルト出身の者を「戦場の鷲」とか単に「鷲」と言うのはそのせいである。

ハルモニア中央部から見ると、エウナーナ・イ・フォエルトは山の裏側にあたる。実際、隣国に行く方が、一番近いハルモニアの都市クセスに出るより便がいい。言葉や暮らしよりもハルモニアとは異質で、むしろ、周辺一帯の文化圏の中心にエウナーナ・イ・フォエルトがあるのである。

にもかかわらず、エウナーナ・イ・フォエルトがハルモニアである理由には諸説ある。

村人やその近隣の者が好んで信じているのは、かつて英雄ヒクサクが敵に囲まれた折、剣を取り決死の山越えを敢行してその危機を救ったのがエウナーナ・イ・フォエルトの戦士たちであったという説である。

真実は歴史に埋もれている。

しかし、エウナーナ・イ・フォエルトの輩出する戦士たちがその

伝説を真実と思わせる強さを誇っているのは事実である。古今の名のある勇士たちも枚挙に暇がない。

村人はがっちりとした長躯の持ち主が多く、この恵まれた身体が高山の厳しい環境に自然と鍛え抜かれる。

また、幅広の剣を使う独自に体系化された剣技、紋章への感応力の高さ、それを操る精神力の強靱さ。こういったものもエウナーナ・イ・フォエルトの強さを裏打ちしている。

人々が「戦場の鷲」と彼らを呼ぶとき、そこにはしばしば尊敬と畏怖の念が籠められている。

ハルモニア軍はその特性を生かすためにエウナーナ・イ・フォエルト出身の者たちで一隊を作った。鷲の軍旗を掲げる彼らに精鋭の呼び声が高いのは故の無いことではなかった。

一団の男たちが黙々と板敷きの道を歩いている。

周りは高地湿地帯で、狭い板の道を踏み外せば泥に足を取られることになる。

男たちは、色は様々ながらみな一様に長套を身にまとい、それを立派な細工の施された留め具で留めていた。歩くのにあわせて揺れる長套の裾から、幅広の鞆の先が見え隠れする。

エウナーナ・イ・フオエルト  
戦場の鷺である。

長い行程を歩き続けたのだろうか、男たちには疲労の色が濃い。だが、その表情に暗いものはない。

隊列の殿を務めるは二人。そのやや背の高い方、名を、ゲド、と云った。

時は夏。

高山の夏は短い。草花はその短い夏の陽の光を奪い合うように茎を伸ばし、花を咲かせる。

ゲドはこの湿地帯の風景を愛していたが、あいにく、今日は薄く霧がかかっている。見晴らしのいい平らな土地に小さな花々がいっぱい咲き乱れる様は見通せなかった。

見えるのは人が通るたびに頼りなげに揺れる沿道の草ばかり。膝ほどもない低い茎の先には小さな白い五弁の花がちよこんとついている。

「ゲド、知ってるか？」

同じく殿を務めているレーフが声をかけてきた。レーフはこの三十人余の小隊の副隊長である。

「ん？」

「そのな、道のそばのな、白い花」

「ああ」

「草に見えるがな、木なんだそうだ」

ゲドは歩きつつ、その草をもう一度見直してみた。やはり、草に見える。

「ハルモニアから来た偉い坊さんが言ってたんだ、間違いない」「そうか」

「お前んとこの坊主に教えてやるといい。好きだろう、こういう話は」

「そうだな」

そのまま二、三步進んでからゲドは微笑を浮かべながら言った。

「もう知っているやもしれん」

「違う」

二人が笑みを交わしたとき、前方から声があがった。

「見えたぞ！」

薄い霧で風景は切れ切れだったが、見えては隠れる視界の向こうに目印の二本柱が見えてきた。

この柱が見えてくる辺りから湿地がようやく固い地面に変わってくる。

誰かが戦歌を歌い始めた。すると、たちまち男たちの声がそれに唱和した。

ボ・シルヴェル・バルユストベト  
銀の峰の上に

ニヤ・スタンダレト  
掲げよ 戦旗

ファミユ・イ・フエデルソルト  
故国に残し係累も

ハル・グレイドヤ・アグ・セーガルヒュムン  
凱歌に应えて欣喜する

ヴイ・エウナーナ・イ・フオエルト  
我ら 戦場の鷺

ブローサンデ・ヴィンデン  
渡る 清風

ヴイ・エウナーナ・イ・フオエルト  
我ら 戦場の鷺

エウ・ヴィスデ・ヴィンクエ  
不朽の翼

レーフも高らかに歌っている。ゲド自身はその唱和に加わっていなかったが、穏やかな表情で男たちの歌声に耳を傾けていた。